

新島講座についての報告

新島講座は、創立百周年記念事業として、新島襄を記念して一九七九年から開設された事業の一つで、立学の精神を基盤として現代にふさわしい教育、研究の幅広い交流を図り、わが国の学術・文化の進展に寄与することを目的としております。

新島講座には、内外の碩学を講師として京都・同志社に招聘して開催しているものと、同志社から講師を派遣して東京に開催の場を設けているものとの二つがあります。

昨年十月二十六日(水)、二十七日(木)の二日にわたり、京都・同志社にて開催いたしました第十二回新島講座並びに十一月五日(土)東京にて開催いたしました第九回新島講座の講演要旨を記述いたしました。

第十二回新島講座

講師 イェール大学名誉教授

ジョン・W・ホール博士

講演会

○テーマ・「アメリカ人の見た日本―変化の半世紀―」

十月二十六日(水)午後一時十五分

於、同志社大学神学館チャペル

セミナー(公開)

○テーマ・「真珠湾攻撃前の牧歌的京都―

最後まで残ろうとしたアメリカの若者の回想―」

十月二十七日(木)午後六時二十分

於、同志社大学寧静館五階会議室

(講演要旨)

ホール教授は、一九一六年東京生まれ、

三九年アーモスト大学卒業、五〇年ハーヴ

ード大学より博士号を取得後、ミシガン大学教授を経て、六一年イェール大学教授、八三年同大学名誉教授となった。米国アジア学会会長、日米友好基金委員長などを歴任する一方、日本歴史の分野で学界に貢献された。主な編著書に、

Government and Local Power in Japan, 1500-1700(1966), Japan before Tokugawa (共著、1980) のほか多数の論文があり、

現在出版間近の Cambridge History of Japan の編集主幹を務めている。

ホール教授はまず、十月二十六日午後本学神学館チャペルで「アメリカ人の見た日本―変化の半世紀―」と題して、講演された。氏は、日本で生まれ、初期の人間形成期の大部分を京都で過したことが、氏の人生に大きな影響を与えたと述べ、アーモスト代表として同志社に派遣されたとき(1939-41)本格的な日本研究をしようとしたことを明らかにした。

ついで、アメリカにおける日本研究の発展とその財政的、制度的基盤の推移を概観

し、たとえば、R・ベネディクトの『菊と刀』に象徴される「敵としての日本」の研究から、第二次大戦を経て、日本の文学、政治、歴史や文化などを含めた総合的な日本研究に発展していったことを指摘した。

十月二十七日の夕方は、本学寧静館会議室で、「真珠湾攻撃前の牧歌的京都―最後まで残ろうとしたアメリカの若者の回想」と題して、公開セミナーが行われ、ホール教授はアーモスト代表として同志社に滞在した経験を中心に話された。ホール氏は秘密警察に虐められた経験はなく、たとえば、一九四〇年に始まった隣組が、アーモスト代表という潜在敵国であるアメリカの国民を隣組の正式な一員として加えていたことをみて、「牧歌的」な京都の一面を残していたと指摘し、当時の町内会、隣組の資料を紹介した。

日米関係が緊迫の度を加え、同志社に係する宣教師が次々と帰国を決意するなかで、ホール教授は、アーモスト代表の任期終了後も日本に留まろうとしたが、アーモ

スト大学学長の命令で帰国を決定せざるを得なかったこと、アメリカに帰る船が容易に見つからず必死の思いで頼んだ憲兵隊が下関經由上海行きの船に乗れるように手配してくれたことなど、数多くのエピソードをユーモアをまじえながら話された。

講演、セミナーとも、ホール教授の同志社との戦前からのつながりを反映して、同志社関係者が多数出席し、いずれも盛会であった。

第九回東京新島講座

(演題ならびに講師)

○抑圧と飛躍の青春

——幕末の新島 襄——

同志社大学法学部教授 伊藤彌彦

○江戸期の宮廷と菓子

——棕屋道喜の文書から——

同志社女子大学教授 林 淳一

(講演要旨)

伊藤彌彦教授の講演は「新島襄がどんな人物であったか」という問題と、「これまで

新島襄にどんなイメージが付与されてきたか」という問題とは峻別してみる必要がある。キリスト教布教者新島というイメージは、デイヴィスの傑作『新島襄の生涯』をはじめとして今日まで続いている。他方、ナシヨナリスト新島、憂国者新島イメージは、「成功したる吉田松陰」(山路愛山、明治三十八年)あたりを引金とし、昭和ファシズム期に極大に達し、現在も消滅していない。

しかし刊行中の全集に則して新島襄の発言と行動を追うならば、新島襄は政治家になっただけではなく教育家、教育事業家として一身を処していた事実が浮び上ってくる。この観点から脱国の動機や幕末生活をふりかえると、海外脱出は「くのために」という積極的動機付け以上に「くから逃れたい」というネガティブな動機付けが強烈であったことが指摘できる。青年新島における「脱檻」の問題である。檻とは藩主や父の保護を意味すると同時に束縛、指ひしぎを意味する。

安中藩板倉家七代藩主勝明公の開明的藩校政策下に才能を見出され、しびれるような抜擢登用によって「勉学指向型人間」になっていたこの下級士族出身の青年は、つぎの勝殷公時代に、いわば二階に上っているうちにハンゴをはずれた状態になる。そして不満をつのらせ、ふてくされて「個儼不羈なる書生」に変じたのである。すでにこの幕末、教育の機会均等と能力主義の洗礼と挫折を経験していたわけである。これがのちに明治の青年たちに学校教育の機会を供しようとした新島襄の宿志の原点となったように思われる。

家族の寵愛をあびて育っただけに家を捨てることに深い負い目を感じていた新島であったが、自立のためにはあえて家と藩を切りすてて青年らしい旅立ちをした。この新島の脱出は二段式ロケットのように、江戸から函館へ、函館から米国へ、と行われた。その際江戸から函館への脱出こそ、かれの人生の飛躍に他ならず、決定的に重要であったのではないか。それを新島襄は周

到に処理し、合法的離藩（脱藩ではない）に成功したのである。

このころの新島襄のナショナリズムは、通常云われるような対外的危機感に立つ憂国の情とはいいがたく、むしろ暗君の支配する政治体制が国を失わせるとする国内政治批判を軸にしたものであった。

次に林淳一教授の講演は京都の老舗川端道喜の所蔵する文書から、江戸期の宮廷と菓子との関わりについて述べた。道喜は現在まで十五代続いた由緒ある粽屋であり、初代道喜は室町末期、京都御所の近くに住んで餅を商ったが、当時、御所は経済的に困窮していたので、道喜は天皇の朝食を毎朝、御所に献上した。この献上は明治初年まで三百年以上にわたって続けられ、この間御所の菓子の御用を勤めた。年中行事については、道喜が例にしたがって調進したので「御定式御用品雛形」の図によって材料、飾り付けなどが分かる。

その他の注文は「御用永代要聞記」に記載された。これは江戸中期から後期まで百

七十九年間にわたる、京都御所からの菓子の注文控帳である。当時の菓子の名称、製法は他の資料でも知られるが、実際にどのような菓子が用いられたかを知る資料はきわめて少ないので貴重な資料である。

「御用永代要聞記」に記載された、千八百九十件の注文を分析すると、菓子の変遷、宮廷生活が浮かび上がってくる。注文のそれぞれ三分の一は赤飯など飯類と餅とで、残りの三分の一は粽（ちまき）とその他の菓子である。また、御所で喪に服する時、御清所の灰を入れ換えるが、この時道喜から灰を献上する定であった。飯類の中でもっとも注文の多いのは赤飯で、種々の行事に用いられ、一回の注文で最高十二石の注文が出たこともある。白蒸は上棟、入内、法事などに用いられるが、ある時期から、白豆入白蒸が現れ、次第にその出現率が増して、末期にはほとんどが白豆入になっている。

小戴は着帯の時に用いられる餅であるが、時代とともに二枚掛け小戴、ならし小

戴、御膳小戴と変わっていき、名称、注文数の変化から、奥御所の女官、典侍たちの心理の動きを読み取ることもできる。

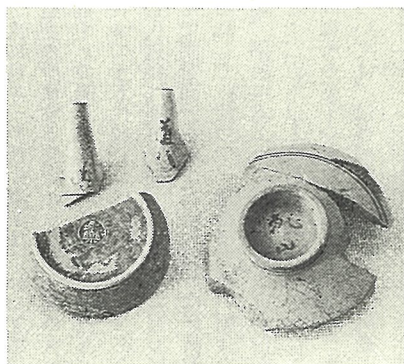
その他の菓子類の出現は二期に分かれる。初期の延享―安永年間には草餅、あん餅など材料がそのまま分かる名称であるが、文政年間以後は野山餅、白糸などそれまでにない趣のある名称が現れ、現在の和菓子の形に近づいている。

このように菓子の注文によって、宮廷の各種の行事の実態をうかがうことができ、注文数は天皇の方針、政治的、文化的情勢によって変わっているが、幕末の数十年の間には物価上昇の影響が強く現れている。

同志社校地出土の埋蔵文化財⑤

鈴木 重治

『乾山・道八・永楽銘陶片』



(江戸時代)
(同志社中学校体育館地点他出土)
乾山銘の高台径 4.1 cm

同志社キャンパスから出土している近世の陶磁器のうち、在銘の資料はきわめて少ない。

ここに示す乾山・道八・永楽銘の陶片は、公家屋敷や武家屋敷で使った懐石用の食器と、それに関係する資料の中でも基準となる一群である。

乾山(一六六三―一七四三)は、兄光琳

とともに近世美術史上に一頁を残しているが、情趣的で沈静な作品が評価されている。仁清と親交し、元禄十二年(一六九九)彼から土、釉、絵付などを記した陶法書を伝受した。一方、楽家四代(一入)とも懇意で、彼からは楽焼を学んでいる。京都銀座年寄中村内蔵助などの理解者を得て作陶に従事し、とりわけ書は乾山のもっとも得意とするところと定評がある。また

「乾山焼」の特徴として絵替り金彩の土器皿、錆絵付に白を配したものがよく知られている。乾山は、楽焼の釉の下に赤・緑・黄・紺青・紫などの顔料で絵付することを初めて試みており、それに成功している点でも重視してよい。

道八は、初代が高橋道八で、二代が仁阿弥道八(一七八三―一八五五)である。木米とともに頼川の門に入り、京焼伝統の純日本風の作品をめざし、木米の中国的感覚と対比される。

永楽保全(一七九五―一八五四)は、当時の煎茶趣味に乗じて、交趾写し、祥瑞写し、金欄手などを工夫し、明るい華麗な色調に特徴のある作品を残している。

(大学校地学術調査委員会調査主任)